

2006年10月12日、中国は6年ぶりに宇宙白書を公表した。2000年に10年間の目標を掲げて発表された「中国的航天」に続く2回目、中国の宇宙開発計画の中間評価を行ったものといえる。中国は、宇宙開発を行う目的として、知識の拡大、社会の発展の促進、経済成長、科学技術の発展などによる総合的な国力の強化を挙げている。今後5年間の目標及び課題としては、急速に発展してきた中国の宇宙開発能力を基に、さらに幅広いミッションを世界最高水準の技術で展開するために、次世代ロケット、地球観測システム、通信・放送衛星システム、測位衛星、有人宇宙船、月周回衛星などの課題を挙げている。中国は過去5年間の宇宙開発をほぼ計画通りに実現してきた。今後5年間の目標であるドッキングを含む有人宇宙飛行や月探査計画の実現性も高いと予想される。

トピックス 7 2006年版中国宇宙白書に見られる中国の宇宙開発動向

2006年10月12日、中国は2006年版中国宇宙白書を公表した。これは中国の宇宙開発動向を内外に示す白書として、2000年11月に発表された「中国的航天」に続き6年ぶり、第2回目となるものである。2000年の宇宙白書では、約10年間の目標として①有人宇宙飛行の実現、②独自の衛星測位システム、③衛星通信システムの構築、④月探査など掲げ、20年先以降まで展望した長期目標として、宇宙産業化などを挙げている。

今回の白書の構成は、宇宙開発の目的、過去5年間（2001～05年）の宇宙開発の成果、今後5年間の開発目標及び主要課題、開発政策、国際協力の5章から成り、前回の白書で掲げた宇宙開発計画の中間評価を行ったものといえる。

まず、宇宙開発の目的では、①宇宙空間を探索し、地球と宇宙に関する知識を拡大する、②宇宙の平和利用で人類の文明と社会の発展を促進し、人類の幸福を築く、③経済成長、科学技術の発展、国家安全保障等の要求を満足させ、国民の科学的素養を高め、国家の利益を維持して、総合的に国力を強化する、などが挙げられている。

過去5年間の宇宙開発の成果としては、2001年から2005年までの間に中国は24回連続で「長征」型ロケット打上げに成功し、28機の衛星を打ち上げた。主な衛星シリーズとしては、①回収式衛星（FSW）、②通信衛星「東方紅」（DFH）、③気象衛星「風雲」（FY）、④科学実験・技術実証衛星「実践」（SJ）、⑤地球資源衛星「資源」（ZY）、⑥航行測位衛星「北斗」（Beidou）、⑦有人宇宙船「神舟」、などがある。このうち、「神舟5号」は2003年10月に世界で3番目となる自力での有人宇宙飛行に成功し、2005年10月には「神舟6号」で2名の搭乗員が5日間の宇宙飛行を行った。また、2005年4月には香港亚太通信衛星会社が長征ロケットにより Apstar 通信衛星を打ち上げた。これは中国では

6年ぶりの商業用打上げであった。このような宇宙技術の発展とともに、衛星による地球観測、通信・放送、測位などの宇宙応用も拡大した。

今後5年間の開発目標及び主要課題としては、①次世代ロケット、②地球観測システム、③通信・放送衛星システム、④測位衛星、⑤宇宙育種衛星、⑥天文観測衛星、⑦「神舟」のドッキング、⑧月周回衛星などが挙げられており、過去5年間に急速に発展した中国の宇宙開発能力を基に、さらに幅広いミッションを世界最高水準の技術で展開しようとしている。また、射場の総合試験能力及び効率の向上や深宇宙探査に対応できる追跡管制ネットワーク技術の向上なども課題として掲げている。

開発政策では、開発のプライオリティ設定、基礎研究の重視、宇宙開発の産業化、知的財産権の強化、標準化の促進、政策・法規の整備、宇宙開発資金の保証、宇宙開発活動への参加の奨励、宇宙開発に従事する人材の育成強化などが挙げられている。

国際協力では、これまでに中国が築いてきたアルゼンチンや欧州など13の国・宇宙機関・国際機関との二国間協力や、中国が設立を提唱したアジア太平洋宇宙協力機構（APSCO）及びアジア太平洋諸国との多国間協力の実績を継続する。

中国国家航天局（CNSA）の孫来燕局長は、今回の宇宙白書の発表に関連して、有人宇宙船「神舟6号」は10億元以下、月探査計画は10億元余りを予定しており、米国の民事宇宙開発などと比較して極めて低コストであると述べた。過去5年間の宇宙開発は前回の白書で示された構想に沿ってほぼ計画通り実現されてきたことから、今後5年間もドッキングを含む有人宇宙飛行や月周回衛星などの計画の実現性は高いものと予想される。